

# 未来と狂気と危機感とアイスピック

人間科学部  
人間科学科4年  
守山 文也

私達の世界はもうだめだ、と大人達は口早に言っている。

今でも世界の何処かでは戦争で大勢の人々が死んでいて、地球温暖化とやらで海水は上昇し、株は乱高下を繰り返して、この国では一日に百人ぐらいが自殺を繰り返しているらしい。ニュースや新聞では、未来の嘆きやら何とやらで埋まっている。今日の昼のニュースで、環境問題に対して何かの専門家が『我々に危機感が足りない。不幸は突然襲ってくるのだ。未来を望むのなら常に注意して生きなければならない』と言ったのが印象に残っていた。未来なんて想定不可なのだから注意なんてしようがないだろうに、と冷めた頭で考えていた。大体、何もかもに注意をして生きるなんて、考えるだけでしんどそうな話だ。

そんな駄目な世界に呼応してか、この辺りでも猟奇的な殺人者が現れたそうだ。狙いは女子高生で、その心臓を鋭利な刃物で一突き、と言うのが殺人者の手口らしい。分かっていることはそれだ

けで、警察はまだ凶器すら特定できていないとワイドショーで批判していた。こういう事件も被害者の『危機感が足りない』で片付けられるのだろうか。

このように、私の意志とは関係なく色んな出来事や事件が起きている。だけど、まあ、そんなことは子供である私には割とどうでもよくて。どうせ、世界で何が起きても何も変わらないことは知っている。何も変えられないことも知っている。だから、私は今日を何となく生きるだけだ。

そうして、今日は近くの公園のベンチに座りながら、コンビニ買ってきたお菓子やジュースを飲みながら、友人とただ駄弁っている。既に日は西に沈み、空は藍色に染まっていた。今日は新月なのか、星はいつもよりも煌々と輝いていた。

「今日も綺麗な星空だねえ」

私の隣に座っている友達は肉まんを頬張りながら空を眺めて呟いていた。彼女は制服の上からコートを羽織っている。まだ十月に入ったばかり

でその格好は少し暑苦しくないとはいいたくなるが、彼女にとってはもう寒いのもかもしれない。下手に何かを言ったら機嫌を損ねるも馬鹿らしいので、何も言わないことにした。

「最近は何も続いていたもののね」

「そーそー」

今日は彼女が公園で星空を見たいと我儘を言い出したため、それに付き合うことになった。何故、彼女が急にそんなことを言い出したのかは分からないが、まあそんな日もあるのだろうと深く考えずに納得した。ここ最近では近場で殺人事件が何件もあったため、集団で寄り道せずに帰ろうと学校から言われているのだが、彼女の頼みならば仕方がない。それに、私が偶然に殺人鬼と出会って殺される可能性なんて、それこそ微小なものだ。気にするほどでもない。

「そういや、進路とか決めたの」

「いいえ、全く」

「マジで」

彼女が驚くのも無理は無い。今の私達は高校三年生だ。そろそろ進路を決めなければいけない時期に来ている。だが、私は未だに何も決められずに居る。進学か就職か、それすらも考えていない。「どうにも、未来の事について考えるのは苦手なのよ」

「……それにしても、もうちょっと危機感とか持ったほうがいいんじゃないかな」

「危機感、ねえ」

どうにも、私はそういうのを持つのが苦手らしい。いや、苦手というよりも意識することができない、という方が正しいのだろうか。

「だって、大人達は経済危機がどうか不況がどうかと言ってるけれど、何も変わらずに生活してんじゃない」

「わーお、急に話がぶっ飛んだね」

「茶化さないで。……まあ、そういうのを見ていたら、何というか……結局、私が何をしても何も変わらないんじゃないのかって思うのよ」

何処へ進学しようが就職しようが、落ち着く所に落ち着くだけなのではないだろうか。その思いをどうしても拭い去ることができない。勿論、そうでないことは確かに分かっている。頭では分かっているのだが、実感として感じる事ができない。彼女が言う「危機感がない」と言う言葉は

成る程、的を射ているように思えた。

友人は頭をポリポリと掻いて呆れ顔になっている。

「何というか青春だね」

「そうなのかしら」

青春、とは何か違うような気がした。だが、このモヤモヤと鬱屈した感情を言い表すに値する単語は私の脳内には存在しなかった。

「ま、とにかく未来の事なんてわからないわよ」

「そうそう。もしかしたら明日なんて無いかもしれないからね」

「それはちよつと、飛躍し過ぎじゃないかしら」

「いや、分かんないよ？ 人生、何が起るかは分からないもんだし」

「……まあ、隕石でも落ちて世界が崩壊する可能性もコンマ数%は存在するものね」

「それもあるかもねえ」

にしし、と彼女は無邪気に笑う。

隕石が落ちてくる、は少ししい過ぎかもしれない。それに明日が無くなる——つまり、世界が減ぶのならば、もつと緩やかに減ぶのではないかと思う。突然の変化なんて、起こそうとしても起きないものなのだから。

「そういえば最近、この辺りに殺人鬼が出たとか」  
急な話題転換に私は少しまごついた。彼女の話

のテンポがおかしいのは何時ものことだが、今日はいつにもまして脈絡がないように思えた。

「……そう言えば、ニュースでそんな事を言っていたわね」

「被害者は全員、女の子らしいよ」

ふうん、と相槌を打つ。この近くで何人かは死んだことは知っていたが、それが全員女性なのは初めて聞いた。

「アイスピックで心臓を一突き、だってさー」

トン、と私の胸に拳の底を当てる。その後、手を開いて私の胸の辺りを弄り「うーむ、健康的なあばら骨」と呟いたのが何となくイラッときたので、ごつんと頭に拳骨を落としてやった。「痛いよ」と泣き言を漏らしていたが、私は無視した。大体、件の殺人鬼のせいで、学校からは「寄り道せずに帰りましょう」とのお達しが出ているのに彼女の寄り道に付いてきてあげたのだから文句を言われる筋合いはない。

ふう、と一つ溜息を吐く。

「その殺人鬼は何を考えて人なんか殺しているのかしらね」

それは、単純な疑問だった。ワイドショーでは自己顕示欲がどうのこうの、社会への不安がどうのこうのと言っていた記憶がある。だが、  
「何も考えていないんじゃないかなあ」

「何も考えていないって」

思わず私は口ごもる。それは、私の常識では些か考えられないことだったからだ。私はこれまでの人生で人を殺したことは勿論無いが、それでも何も考えずに人を殺せるとは思えない。

「だって、人を愛するのだって理由は要らないじゃん」

はにかみながら、彼女は言った。

「……つまり、人を愛することと殺すことは一緒ってこと？」

「ま、そういうこと」

「何というか、すごいロマンチックな理論ね」

「でしょ？」

にかっ、と彼女は得意気に笑う。何か「いいこと言ったぜ！」的な態度が少し気に食わないが、それはそれとして彼女の理論は少し面白いなとも思った。今まで霧に包まれていた犯人像が、

「だからまあ、これは仕方ない事なんだよね」

彼女はそう呟いて、自分のコートの懷に手を入れた。そして間髪入れずに何かを取り出して、それを私の胸へと叩きつけた。あまりにも急な行動に面食らって、少し後ろへと仰け反った。

「ちよつと、急に何を、するの、よ……？」

急に息苦しさを感じ、言葉が詰まってしまふ。胸に、何かが吹き出すような痛みを感じた。それ

は叩き付けられた痛みというよりも、何かが胸に振じ込まれたかのような、異物感を伴う痛みだった。

「……え、」

頭を下げてみると、胸にアイスピックが刺さっているのが見えた。その細い刃はあばら骨の隙間を滑るように刺さっていた。突然の出来事に脳の処理が追いつかない。今、私は彼女に何をされたのか、どうなっているのか、混乱している。

『アイスピックで心臓を一突き、だつてさ』

ふと、彼女の言葉が脳裏に蘇る。

そう言えば、警察は犯人の凶器についてまだ特定できていないと言っていた。それなのに、彼女は何の迷いもなく犯人の凶器について口にしていた。

「どう、し、て」

「言つたでしょ。理由なんて特に無いよ、必要な」

そこに居たのは、人の服を着た悪意だった。にいい、と普段と変わらない笑みを彼女は浮かべている。

『うーむ、健康的なあばら骨』

あの時、胸の辺りを触っていたのもあばら骨の位置を確認するためだったのではないか。いざ心臓に刺す時に、邪魔にならないように前もって調

べたのではないか。一つ気づけば、彼女の行動の一つ一つが数珠繋ぎのように連なっていく。コートを羽織っていたのは凶器を懷に隠していたから。今日は公園で星空を見ようと言いつ出したのも、人気がない場所に呼び出したかったから。今にして思えば、不自然な所ばかりだった。よく注意していれば私の友達が殺人鬼ということに気づくことができたのかもしれないのに。そして、気付くのが遅すぎた。手遅れだった。

もう、何をしても助からない。

「本当に明日なんてなかったね」

彼女は笑みを浮かべたまま、アイスピックの取っ手を握りしめて刃先を更に胸の奥深くへと沈ませた。不思議な事にアイスピックが沈めば沈むほど痛みは消えていき、代わりに奇妙な脱力感が私の身体を支配した。胸からなにか大事な物が零れ落ちているような気もした。それは、温かいもので、絶対に零れ落としてはいけないような大切なモノだった気がするのに、戻す気になれなかった。その零れ落ちたものを補うように、眠気が私の中に立ち込めてくる。

朦朧とする意識の中で、私は何処かで聞いた言葉思い出していた。

『我々には危機感が足りない。不幸は突然襲って

くるのだ。未来を望むのならば常に注意して生き  
なければならない』

---